

## シュヴァーベン地方フィリンゲン市の謝肉祭で 使用される道化の仮面について

林 敬 太

シュヴァーベン地方の一都市であるフィリンゲン市で開催されるファストナハトは、終始非常になごやかな雰囲気のもとで諸々の行事が繰り広げられる。いわゆる「謝肉祭」や「カーニバル」という語から想像できる乱痴気騒ぎを行わない点が、この市のファストナハトの最も際立った特徴となっている。この平穏さは既にフィリンゲン市で使用される仮面の中に現われ、シュヴァーベンにおいて最も「伝統的」と称される代表的な様式と言われる。

そもそも祝祭という行為の構造には、日常の世界を逆転させる要素が含まれていることは、ミハイル・バフチンなどにおいて十分に指摘されている。ファストナハトの場合、日常の世界が逆転するという現象が起きる際に、鍵となるのが仮面という物であり、ゆえにファストナハトにとって仮面を被ることは必須の要素なのである。

ところが、例えばバフチンの場合、日常とは、身分制などをはじめとする秩序によって成立している社会構造を指し、祝祭によって身分の平等、欲望の開放などを内包する第二の世界が出現する、と述べられている。しかしフィリンゲン市においては、この構造が全て当てはまるわけではない。

同市のファストナハトは、暴力性や放埒さとは別の要素を比較的当初から祝祭に内包していたと思われる。

ファストナハトを代表する仮面の中に、Narrというものがある。卵形でつやのある柔らかな表情の仮面で、この仮面が遡れる限り初期の段階で成立し、ファストナハトの中心となっているのがフィリンゲン市である。仮面の由来は判然としないが、これを「亡霊」「(死者の)影」と見ることもできる。つまり、フィリンゲン市の場合、ファストナハトにおいて逆転する日常とは人間の生きる世界そのものであり、それに対してあらわれてくるもう一つの世界は死者の世界ということになる。

フィリンゲン市におけるファストナハトが、古代ギリシアやローマで *mundus pateto* の日と呼ばれた日や、日本の盆やお彼岸のように、死者が訪れて、死者と生者の世界の融合であると考えられるならば、この行動は説明できるものである。

フィリンゲン市における死者の世界に存在するのは、フィリンゲン市にかつて生きていた人々、すなわち祖先である。ゆえに彼らは現在生きている人間に似ているが違う表情を持ち、彼らの生きていた頃に存在していた旧市街以外には出現しない。そしてフィリンゲン市は、ファストナハトの期間中は彼らの世界でもあるので、その仮面を被った者たちは、市内を闊歩することも可能である。

今回扱ったのはあくまでシュヴァーベン地方の一都市であり、本発表の事例はシュヴァーベン地方の謝肉祭すべてに当てはまるとは言い切れない。しかしフィリンゲンのファストナハトには、地方によって異なる様相を呈する「謝肉祭」の、特徴的なあらわれの一例を見てとることが出来るだろう。